

「国際文化観光都市70周年記念：松江城シンポジウム」報告

松江市では、国宝松江城天守に関わる調査研究に継続的に取り組むとともに、松江城天守の世界文化遺産登録を目指しています。

今回は、国際文化観光都市70周年を記念して、令和3年(2021)7月11日に「松江城シンポジウム」を開催しました。シンポジウムでは、日本を代表する建築史の研究者が、その魅力をディープに語りつくしました。

今回のシンポジウムは、研究者による講演3本に加え、清水真一先生司会のもと、ご講演いただいた3名の先生方、藤岡大拙松江城を守る会会長、上定昭仁松江市長らによるパネルディスカッションが行われ、約200名の市民の皆さまをお迎えし、熱心に聴講いただきました。

第1部：講演

▣ 講演1「日本建築史における天守の位置付け」藤井恵介氏



松江市ご出身の藤井恵介先生(東京大学名誉教授)には、「日本建築史における天守の位置付け」として、戦国大名や江戸時代に入ってからのお城を全体視したときに、それがどういったものだったのかということについてご講演いただきました。

まず、「日本における城郭の誕生」、織田信長の登場をひとつの基準とし、その前後でどのように城郭が変化したかということからはじまり、「城郭建築の展開」、豊臣秀吉をはじめとする、信長の後継者たちの城づくりについて述べられました。続いて「城郭建築の特質、造形の特質」では、お城が登場する以前にどのような建物があったのか、それに対して城郭建築がどのような特徴をもっ

ているかについて述べられました。最後に「その後の建築群」では、「一国一城令」で新たなお城の建築が打ち止めになったのち、お城の建築を経験した後で造られた建物についての紹介がありました。

そして、「お城」というものは、日本全体の建物の問題を考えるうえで非常に重要でユニークなものであるとまとめられました。

▣ 講演 2 「松江城天守国宝へのみち」 上野勝久氏



上野勝久先生（東京藝術大学大学院教授）は、6年前の松江城天守の国宝指定の際の文化庁担当調査官です。「松江城天守国宝へのみち」として、文化財の指定と松江城天守の国宝指定までの「みちのり」についてご講演いただきました。

まず、「文化財保護法の制定と国宝指定」、現在の文化財保護法の成り立ちの歴史と、その成立に伴い、国宝指定がどのような方向に変化していったのかというお話があり、続いて「近年における建造物の国宝指定について」では、社寺建造物においても調査研究の成果をもとに国宝指定が進められていること、その一例として東大寺二月堂の調査などについて述べられました。

「従前の国宝天守」では、松江城天守が国宝に指定される前から国宝であった姫路城大天守、犬山城天守、松本城天守、彦根城天守について、その特徴と国宝指定された理由などを話され、続く「松江城天守の主な建築史研究とその成果」では、なぜ平成になって松江城が国宝に指定されたのか、それに至る学術研究とその成果について述べられました。

「国宝の天守へ」では、なぜ松江城天守が国宝になったのかという説明と、松江城天守が国宝に指定されたあと、ほかのお城に与えた影響などについてお話がありました。最後に、松江城天守は確かに国宝にはなったけれど、松江市には松江城天守をとりまく周辺環境の整備を続けていってほしい、そのためにもさまざまなかたちでの学術調査研究を、先駆的に進めてほしい、各地の良い見本となってほしいとまとめられました。

▣ 講演 3 「世界文化遺産の現状」 西和彦氏



西和彦先生（東京文化財研究所国際情報研究室長）は、松江城天守の国宝指定にご尽力いただいた初代松江城調査研究委員会委員長・西和夫先生のご子息で、世界文化遺産のエキスパートです。今回のシンポジウムでは、世界遺産の現状と、世界遺産全般についてあらためて振り返るお話をいただきました。

まず「世界遺産とは？」では、世界遺産条約は 1972 年にユネスコの総会で採択され、もうすぐ 50 年になること、たくさんの国が加盟し、きわめて高い注目度からユネスコでもっとも有名な条約であると同時に、条約の前文「…顕著な普遍的価値を有する文化及び自然の遺産を共同で保護するための効果的な体制を確立…」からもわかるように、世界遺産に登録するためというよりは、登録を通じて国際的な協力体制を作ろうというのがもともとの目的であることを述べられました。

次に、「誰が決めるのか？」ということで、世界遺産は誰によって決められるのか、その具体的な内容について話されました。続いて「世界遺産の現状」として、世界遺産の登録数とその推移と最近の登録の例について述べられ、現在、世界遺産全体の資産数は 1121 件あり、その内訳は文化遺産が 869 件、自然遺産が 213 件そして文化遺産と自然遺産の複合遺産が 39 件あること、そして「世界遺産の良いところと悩み」として、世界遺産に登録されたことによって生じる利点と問題について、「私たちにとって大切なもの」を「世界共通の遺産」、「顕著な普遍的価値 (OUV)」とどう結びつけるのが非常に難しいということを話されました。

そして「世界遺産に取り組むに当たって」では、自分たちの地元を見つめ直すこと、より良いまちづくりはどうすればよいのかをきちんと検証することが大事であると述べられました。そして最後に、先生ご自身が松江のまちをめぐっての感想、松江のまちは古くはないが価値のあるものがお城の周辺にあり、松江のまち全体を世界遺産と結びつけて考えることが大事であるとまとめられました。

第2部：パネルディスカッション



パネルディスカッション「ふるさとの宝を世界の宝へ-松江城を守り伝え、まちづくりに生かす-」では、コーディネーターに清水真一先生（徳島文理大学教授）松江城天守を後世へと守り伝え、まちづくりに生かしていくこと、また、世界遺産登録に向けてどういった取り組みがなされているのか、そして、今後の松江市に期待することについて、講師・パネラーの皆さまにお話しいただきました。

松江城天守の国宝指定の功労者である、初代松江城調査研究委員会委員長の西和夫先生は、生前、松江城だけを大切にするのではなく、まち全体の歴史を大切にすることを繰り返し述べておられました。国宝指定も世界文化遺産登録も、それ自体が目的ではなく、松江城を後世に守り伝えていくことが目的であり、指定や登録はその手段にすぎません。

今後も、松江城の調査研究をさらに深めていくとともに、松江城だけでなく、この「松江」というまちを世界に誇れる歴史文化都市として、市民の皆さんとともに磨きをかけていただきたいというまとめになりました。

※当日の様子は、松江市公式 Youtube チャンネル（外部サイト）で公開しています。

（松江城調査研究室／令和3年10月21日記）